

平成25年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	名古屋市立香流小学校	氏名	服部 咲
-----	------------	----	------

1. 印象に残る写真2点

● 「戦争の爪痕、内陸国としての運命」



内陸国であるラオスは周辺国の争いに巻き込まれた歴史をもつ。矢印で示す部分には未だ不発弾や地雷が多く残る。世界遺産になりうる遺跡が各地にあるが、なかなか申請できない理由の一つ。発展の妨げとなっている。

● 「店番の合間に刺繍をするモン族の少女」



ナイトマーケットに数多く並ぶモン族の工芸品。彼女が製作したものも数多くあり、英語で購入を勧める。しかし彼女は字が読めない。計算も怪しい。教育は女の子には必要ないという考えが未だ残っているからだ。

2. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

もともと国際理解教育に興味があり、独学で実践を進めてきた。「日本の子どもたちに今の世界の状況を知ってほしい。今の状態が普通の暮らしではない人もいるんだ。もっと広い視野をもってほしい。」という気持ちがいっつもどこかにあったからだ。でも常に心の中では「でも私は行ったことも見たこともないんだ。これで本当にいいのかな。」という思いがあった。自分がまずこの目で見たい、感じてみたい、考えてみたいと強く思い、「実際に目で見て感じることでリアリティのある実践をすること」を目的として研修に参加した。

実際にラオスを訪問してみて、内容も量も想像以上のことを学び、帰国することができた。現地研修の前は学んだことを「教える」という伝え方がぼんやりと頭にあった。しかし、帰国してからは、私が見て、感じてきたことを子どもたちにも「体験する」ことで伝えたいと思った。もちろん、現地でしか感じられないことも多くあるが、「教える」のではなく「感じる」「体験する」という作業を通じて子どもたちと考えていくことで、私の今回の研修の目的が達成されると考える。

3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

「あなたの大切なものは何ですか？書いてください。」「タイフープダイボー？（写真を撮ってもいいですか？）」見知らぬ外国人がペンとスケッチブックを渡し、つたないラオ語で声をかけても、誰ひとり、気味悪がったり一歩引いたりすることはなかった。少し照れながら誰もが一生懸命答えてくれた。印象的だったのはルアンプラバンのナイトマーケット。識字率が低いラオスでは、マーケットの人すべてが字を読めるわけではない。私が質問を渡したお母さんは、字を読むのが苦手だったのか、少し困った笑顔でスケッチブックを見ていた。「悪いことをしたな。」と思った私を前に、お母さんは近くのマーケットのお母さんに次々と声をかけていった。声をかけられたお母さんはまた次の人に声をかけ、さらにまたその人が・・・字が読め、書ける人をみんなで探してくれたのだ。「断られたらまた次の人に聞けばいいか。」と軽く考えていた私は、彼女たちの一生涯懸命な姿に申し訳ないやら嬉しいやら。私も誰かに親切にしようと自然に思えた。そんな優しさの連鎖が、人と関わることに億劫になっている日本にも広がるといいと思った。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

ラオスを訪ねて気付いたのは、ラオス以外の国旗をよく見かけるということだ。他国がラオスに援助をし、市場を展開しようとしている証拠だ。中国、韓国、ベトナム、タイ、フランス、日本・・・。その中でもラオスの人にとって日本人は、自分たちと似ている存在として好意的に映っているようだ。それを知ったのは、日本人による援助活動への訪問だった。ラオスの環境問題に取り組んでいる JICA 専門家、各地域の住民と密に活動する青年海外協力隊、彼らと活動を共にするラオスの人々。どの人に聞いても彼らはみな口をそろえて言う。「ラオスの人は日本人と似ている。」「日本人はラオス人と似ている。」遠慮がちな姿、感情をあまりあらわにしない姿、真面目に仕事に取り組む姿・・・そんな些細な行動や仕草が非常に似ているのだという。住む環境、口に出す言葉、考え方は違えど、その感覚はお互いが肌で感じたものなのだろう。だからこそ、日本からラオスへの援助は決して打算的なものではなく、心から「ラオスのために何か手伝えたい」というものになるのだ。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

ラオスは現在、急速な経済発展に伴って様々なものの整備が必要となっている。周辺国が次々にラオスに入りこみ、市場を展開し、情報を入れ、世界遺産に登録されたルアンプラバンでは観光業の整備も必要となっている。現地の人々は、気付けばそのめまぐるしい渦の中にいたのではないだろうか。いや、渦の中にいることさえ気付いていないのかもしれない。彼らだけではどうにもならない状況の中、外からの支援は必須だ。その際、大切なことは何かを今回の訪問で学んだ。「目に見える”物質的な支援を現地の人々の手で継続できるよう、“目

に見えない” 仕組みを一緒に構築していくこと」。丸投げではいけない、手を出しすぎてもいけない、同じ立場で物事を見て同じように考えないといけない。本当に「支援する」とはそういうものなのだ。世界に途上国は多く存在する。彼らはきっと、みながみな、発展したいと思って「途上国」と呼ばれているわけではない。周辺にいる先進国のために“発展せざるを得ない” 状況にある国もたくさんある。そう考えた時、先進国に生きているものとして責任を感じずにはいられなかった。実際に訪問しなければ絶対に感じることのなかったこの思いを、これから形づくり伝えていくことが、私の小さな最初の支援になればと思う。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICAの国際協力事業の良い点は、幅広く事業を展開している点、誰でもが参加する可能性をもっている点、草の根支援の考えが共有されている点である。今回の訪問で出会った日本人の方々は、教育、医療、障害者支援、環境など、扱う分野が様々で、非常に幅広い支援を提供していると感じた。中には専門的な知識を必要とする分野もあるが、青年海外協力隊のように、その気になれば誰でも参加できる可能性があるところ、多くの人が得意なことを発揮し貢献できるところが良いと思った。また、ラオスで出会った支援者たちはみな一様に「現地の人々の考えに沿い、地道な活動を行うことこそが大切である」という考えをもっていた。自然にその考えに行き着くのかもしれないし、偶然にも今回出会った人がみな同じスタンスだったのかもしれないが、即物的な援助ではなく継続的な援助を行うスタイルが良いと感じた。今後は可能であれば、一つの事業が実を結び、現地の人々の手に渡っている現場があれば見てみたいと思った。今回視察した事業はどれも期限が決まっており、その期間の中で現地の人々の手に渡すというものであった。実際に事業がどのように収束していくのか、興味がある。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・手荷物は15kg前後で抑えるのがコツ。スーツケースの半分は手荷物、半分は手土産で十分。帰りは手土産スペースに自分のお土産が十分入ります。
- ・服は4日分ほどで足りる。ズボンは2本で十分でした。ランドリーでの洗濯のタイミングが大事。旅行用洗濯セットが役立ちました。
- ・サンダルは必要。バスタブがないホテルが多いです。
- ・途上国では何が自分のお腹に響くかわかりません。胃腸薬は必要。頭痛薬酔い止めも役立ちました。
- ・飛行機内は寒いので羽織ものは必要。
- ・名刺はあるなあと思いました。アドレスはPCのものを。
- ・自分アルバムがあると便利。生徒の写真、家族の写真、日本の儀式の写真、日本の景色の写真など、項目は色々あるといいです。
- ・言語ブックはやはりあるといい。
- ・マナビノオトが入る前掛けカバンがあると便利。すぐに取り出せます。私はリュック+前掛けにしましたが良かったです。
- ・カードは使える場所が多かったのでお金が足りない時に役立ちました。
- ・前年度行った方のアドバイスは本当に役に立ちました。一通り読んでおいて損はなし。
- ・一日の振り返り、日直ノートは時間のある時に少しずつ書いておくと良い。夜、部屋では疲れてなかなか取

り組めません。

- ・色紙や色ペンがあると便利。ガイドさんや通訳さんに最後メッセージを書いて渡せます。

6. その他全般を通じての感想・意見など

百聞は一見にしかず。体験に勝るものはありません。今回の研修に参加して本当に良かったです。教師としての在り方も、世界に対する考え方も、自分自身の人生でさえ振り返るきっかけになりました。日本でもラオスでも仲間ができ、人と関わることの楽しさを思いだし、つながることの不思議さや喜びを感じました。まだ迷っている人がいたらぜひ薦めたいと思います。

国際協力という大きな取り組みは、世界という大きな枠組みの中で見れば本当に小さな、ほんの少しの取り組みです。私たちができることは限られている。小さなことしかできないけれど、それがいつか世界の誰かとつながる国際協力となることを願い、今回の研修で学んだことをより多くの人に伝えたいと思います。

以上